

長野県更埴市

生仁遺跡 III

—— 県営雨宮地区湛水防除事業に伴う発掘調査報告書 ——

1989

更埴市教育委員会

更埴市遺跡調査会

長野県更埴市

生仁遺跡 III

—— 県営雨宮地区湛水防除事業に伴う発掘調査報告書 ——

1989

更埴市教育委員会

更埴市遺跡調査会



例 言

- 1 本書は、昭和63年5月31日から同年12月5日までの93日間に、県宮両宮地区湛水防除事業に先だって実施した生仁遺跡発掘調査報告書である。
- 2 調査は、更埴市より委託を受けた更埴市遺跡調査会が、調査団を組織して行い、佐藤信之が担当した。
- 3 現場における実測は、山根洋子、賛田 明、佐藤が行い、遺物の実測及びトレースは、賛田、小野紀男、佐藤が行った。
- 4 発掘調査についての執筆は佐藤が行い、骨については信濃町立野尻湖博物館の中村由克氏に寄稿いただいた。
- 5 出土遺物および遺構については、上山田小学校教諭森嶋 稔氏、長野県埋蔵文化財センター笹沢浩氏、市川隆之氏の御教示を得た。
- 6 本調査の出土遺物、実測図、写真等はすべて更埴市教育委員会に保管されている。
なお、本調査の関係資料については、生仁遺跡湛水防除2次を略して「NM2」と表記した。



凡 例

目 次

- 1 遺構図、遺物実測図の縮尺は原則として次のとおりである。

住居址	— 1/6	土 坑	— 1/6
溝址断面図	— 1/6	土 器	— 1/4
石 器	— 1/2	骨角器	— 1/2
金属器	— 1/2	玉 類	— 1/4

その他のもの、あるいは縮尺が異なるものについては、その縮尺を記した。
- 2 遺構図中のNは真北を示している。
- 3 遺構図中のスクリーントーンは、下記を示している。

焼 土		灰・炭化物	
-----	---	-------	---
- 4 住居址の主軸方向は、カマドを中心として設定し、カマドを持たないものは長軸方向とした。
- 5 遺物実測図中の黒色のスクリーントーンは、黒色処理を表わし赤色は赤色塗彩を表わす。

例言 凡例 目次

I	調査の概要	1
II	調査の経過	2
III	遺跡の環境	3
IV	遺構と遺物	9
1	遺構の概要	9
2	おもな遺構と遺物	9
V	まとめ	24
VI	生仁遺跡出土の骨角器と動物遺体	26
	図 版	
	写真図版	

I 調査の概要

- 1 発掘調査委託者 長野地方事務所
- 2 発掘調査受託者 更埴市・更埴市遺跡調査会
- 3 発掘調査実施者 更埴市教育委員会・更埴市遺跡調査会
- 4 発掘調査場所及
び土地の所有者 更埴市大字雨宮
長野県
- 5 発掘調査遺跡名 屋代遺跡群生仁遺跡（市台帳No.31-11）
- 6 調査の目的 県営雨宮地区湛水防除事業に伴う当該遺跡の記録保存
- 7 調査期間 昭和63年5月31日～同年12月5日（93日間）
- 8 調査面積 2,000㎡以上
- 9 調査方法 全面発掘調査
- 10 調査費用 費用総額8,700,000円
- 11 調査会の構成
 - 会 長 安藤 敏 更埴市教育委員会教育長
 - 理 事 田沢佑一 更埴市議会
佐藤穂火 更埴市教育委員会教育委員長
山崎重信 更埴市区長会長
寺沢政男 更埴市役所総務課長
 - 監 事 山崎栄二 更埴市社会教育委員会委員長
関 京子 更埴市役所会計課長
 - 幹 事 武井豊茂 更埴市教育委員会社会教育課長
西沢秀文 更埴市教育委員会社会教育課文化財係長
矢島宏雄 更埴市教育委員会社会教育課文化財係主事
佐藤信之 更埴市教育委員会社会教育課文化財係主事
- 12 調査団の構成
 - 団 長 安藤 敏
 - 調査担当者 佐藤信之
 - 調 査 員 山根洋子
曾田 明 国学院大学学生
 - 調査補助員 小野紀男 奈良大学学生
 - 調査参加者 青木英知子 市川睦雄 内山はつ 岡田栄子 久保啓子 小林昌子
小林芳白 小松由里子 坂口城子 篠原節子 白石正生 高野貞子
丸山重子 宮崎恵子 村山 豊
 - 事 務 局 武井豊茂 西沢秀文 矢島宏雄 佐藤信之 青木猛治 田中啓子
山根洋子（社会教育課文化財係）

II 調査の経過

昭和61年、県営雨宮地区湛水防除事業により、排水機場と	日誌
導水路建設が予定されたため、市教育委員会では4月24日、	5月31日
建設予定地内の試掘調査を行った。その結果排水機場につい	重機により表上除去を行い作業を開始する。
ては埋蔵文化財は認められなかったが、昭和63年度に建設が	6月8日
予定されている導水路部分については、遺跡であることが確	1号溝址より馬の骨出土。
認された。試掘調査の結果により、11月26日、県教育委員会	6月11日
文化課、長野地方事務所、市農林課、教育委員会による協議	1号溝址掘り下げ開始するが
が行われた。	出水により調査進まない。
	6月22日
	最初の住居址掘り下げ開始
	7月9日
	馬の骨を一括で取り上げ用意
	7月14日
	信州ケーブルテレビ取材
	7月21日
	B区造構実測を開始
	7月22日
	東小学校6年生見学
	7月29日
	昨日の雨により調査区水没
	8月1日
	C区重機により表土除去
	8月9日
	18号住居址よりト骨出土、祭祀造構掘り下げ
	8月22日
	C区までの調査終了し、小島遺跡の調査へと移る。
	10月24日
	D区調査開始、重機による表土除去を行う。
	10月26日
	D区最初の住居址検出。
	11月10日
	遺構実測開始。
	11月12日
	43号住居址の炭化材掘り下げ。
	11月23日
	現地説明会開催。
	12月3日
	機材搬出を行い、掘り下げは本日をもって終了とする。
	12月5日
	実測終了し、調査完了とする。
昭和62年、市教育委員会では発掘調査計画書を作成し、県教育委員会に提出して指導を仰いだ。3月4日、建設に伴う代替地を掘った所遺物が出土したとの通報があり、3日間調査を行った。4月30日、県教育委員会より、市教育委員会の発掘調査計画書によって調査を実施するよう指導があった。	
昭和63年、事業計画の変更、賃金等単価の変更があり、若干の調査計画の変更がなされ、3月9日、長野地方事務所より、57条の提出があり、4月30日、長野地方事務所長と更埴市長の間に委託料7,100,000円で委託契約が締結され、同日、更埴市長と更埴市遺跡調査会長との間にも同様な委託契約が締結されたため、発掘調査の準備を開始した。5月27日、98条を提出し、31日より発掘調査を開始した。A区からC区の調査が終了した8月22日で、一旦調査を中止し、工事の実施が迫っている小島遺跡等の調査を行い、10月24日からD区の調査を開始した。D区は水田址になると考えていたが、全面集落址となったため、調査が終了したのは12月5日となった。調査期間が伸び、平成元年度に刊行予定であった報告書の作成は昭和63年度に行うこととなったため、12月15日に委託契約の変更が行われた。	

III 遺跡の環境

生仁遺跡は、善光寺平南端となる更埴市大字^{あらかみ}雨宮及び生^い賀^が地籍の生仁地区にあって、東側には鏡^{きやうだい}台山に源を発する沢山川が北流し、千曲川自然堤防の後背湿地となる西側は、更埴条里遺構で知られる屋代田圃が広がっている。さらに北側は東流する五十^い里^り川により、自然堤防と切断されている。自然堤防の東端に流れ込む沢山川によって形成された微高地上に位置しており、南北500m、東西300mほどの広がりを持つと推定される。昭和40年代前半に実施された周辺の圃場整備以前は、後背湿地の水田とは0.5～1mの比高があり、多くは畑地として利用されていた。

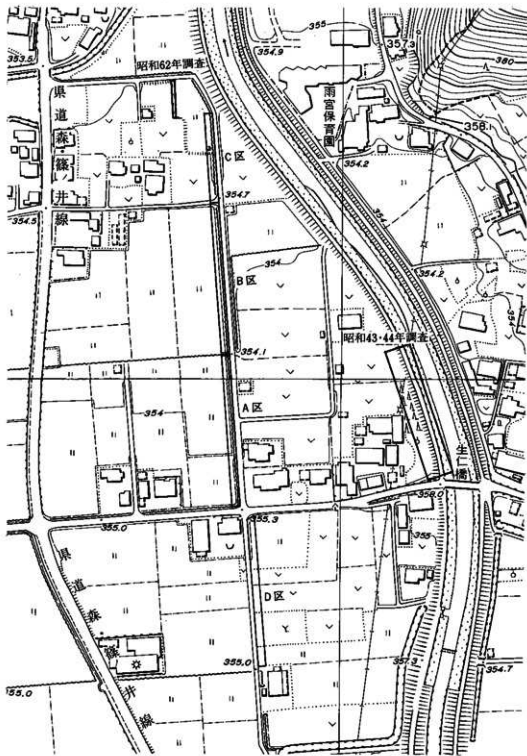
自然堤防を中心に古くから遺物の出土が知られており、城ノ内遺跡では昭和32年から35年に、善光寺平初の学術調査が行われた。また昭和36年から39年には、後背湿地に広がる条里遺構の調査の際、生仁地区に設定されたトレンチより住居址が検出され、生仁遺跡が集落址となることが確認された。昭和43～44年沢山川の河川変更に伴い、生仁遺跡の本格的な発掘調査が行われ、弥生時代から平安時代の集落址と中世墳墓が検出された。特に骨角製品の残りが良く、卜骨を始め多数出土し注目された。昭和44年には圃場整備に伴い、今回の調査部分も含んだ調査が実施され、和同開珎などが出土した。

また生仁地籍には生仁城があったと伝えられており、その名は市河文書にも記載されている。現在も堀ノ内と称する地域が残っている。

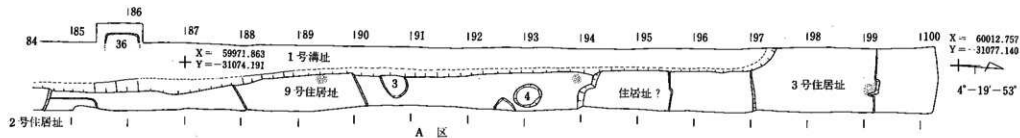
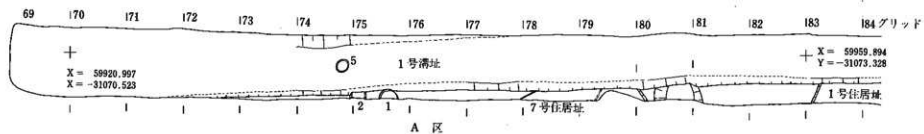
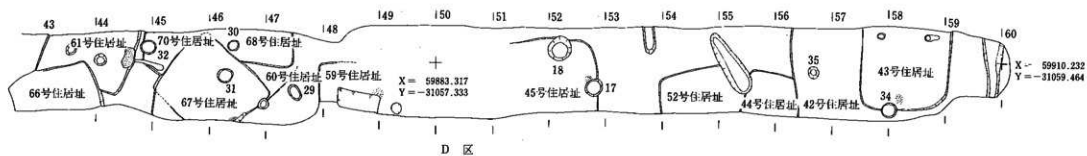
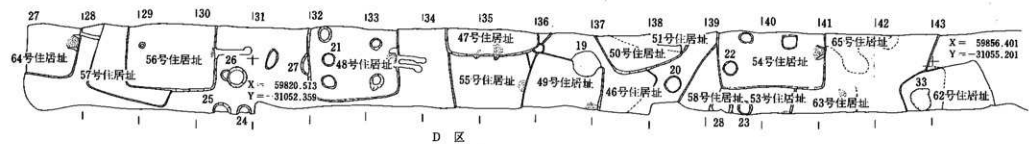


1.生仁遺跡 2.城ノ内遺跡 3.馬口遺跡 4.森将軍塚古墳 5.倉科将軍塚古墳

第1図 遺跡位置図 (1 : 25,000)

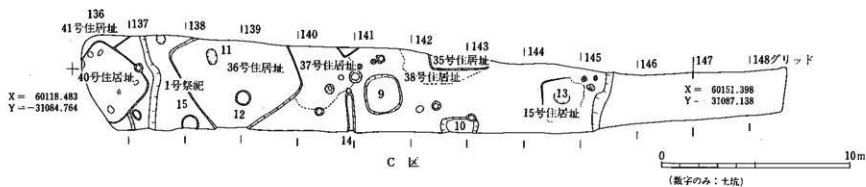
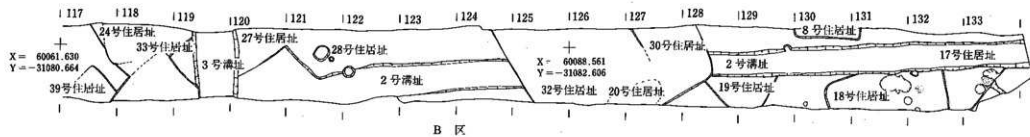
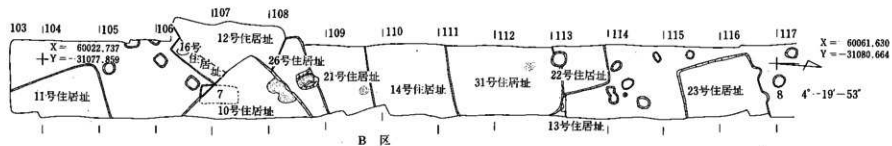


第2図 発掘調査位置 (1 : 2,500)



第3図 遺構全体図(1)





第4図 遺構全体図(2)

IV 遺構と遺物

1 遺構の概要

調査は水路建設に伴い実施されたものであり、対象面積は2,000㎡に達した。住居址70棟、土坑36基の他多数のピット、溝を検出したが、幅約5mと限られた調査区のため、完掘できた住居址はなかった。しかし生仁遺跡の北端となる五十里川から、南へ長大なトレンチを設定した形となり、遺跡の性格を知る大きな手掛りを得た。

調査は耕作の関係から建設用地の中央付近から始め、調査の進行に併せ道路・水路を境として、A区からD区に分割した。

A区は、北側の8mほどを除き、幅3.5～4mほどの1号溝址が南北に走っており、両側では調査区と重複して溝以外の遺構はほとんど検出できなかった。そのため住居址等遺構の検出は少なかったが、残った部分より古墳時代の住居址5棟、平安時代の住居址1棟、馬の墓1基を含む6基の土坑が検出された。

B区は住居址が密集しており、限られた調査幅に加え出水があり、遺構の検出は困難を極めた。検出された住居址は弥生時代が3棟、平安時代1棟の他は不明を除きすべて古墳時代であった。切り合いが多く住居址の形状が纏めたものはほとんどない。11・12・31号住居址は出土遺物も多く、11・31号住居址は焼失住居址と考えられる。弥生時代の18号住居址からは土骨も出土している。

C区南側は畑地として利用されていた部分であり、地表は他より60cmほど高くなっている。弥生時代の住居址2棟、古墳時代の住居址4棟の他、多数の土器に犬・馬・鹿の骨を伴った祭祀遺構が検出され注目される。時期不明の土坑7基も検出されている。

D区は調査地の南側で10月になって調査を再開した部分であり、水田址になると想定したが、調査の結果は全面住居址で、さらに南へと広がるようであった。検出された遺構のうち時代が判断できたものは、古墳時代の住居址14棟、奈良から平安時代の住居址5棟、中世の土坑13基などであり、弥生時代のものはない。

2 おもな遺構と遺物

18号住居址 (第5・6図、図版1・24・26)

遺構 B区の北端より検出された住居址で、西側は2号溝址に切られ東側は調査区外へと続いており、さらに北側上部には17号住居址が構築されている。残存部より形状を把握することは難しいが、長辺が6.3mで軸方向をN-20°-Wに持つ長方形の住居址であったと思われる。床面は良く締まっており顕著で、壁高は最大10cmが測れた。北壁より1.2mほど内側には良く焼けた地床炉があり、周辺には炭化物が広がっている。炉の南東には直径約40cmの掘り込みがあり、壺の

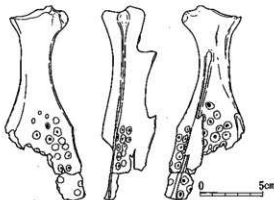
胴下半部が埋められていた。溝寄りに見られるピットは、深さ25cmで柱穴と思われる。住居址中央部の不正形の掘り込みは、後のもので住居址に付属するものではない。

遺物 出土量は少ない。1は赤色塗彩が施された高環で脚部には、4孔の三角形透しがあけられている。坏部は内穹気味に立ち上がり、口縁部との境は明瞭な稜をなし強く立ち上がった後、大きく外開して口縁端部に至る。2～4は甕で頸部からほぼ垂直に伸び口縁部で外開する2と、小形で最大径を口縁部に持つ3がある。いずれも頸部鬘状文を最初に配し、後に波状文を施している。5は甕である。6～8は壺であるが赤色塗彩は見られない。体部上半を失っているがほぼ全様を知ることができる7は、胴部下半に屈曲部を持つが球形胴に近く、頸部には橋掛平行線と、それを縦に切る2条の平行線が配されT字文を形成している。6も同様の文様を持ち、口縁部はラッパ状に開く。8は床面に埋設されていた土器で、胴下半の稜となる接合部で欠かれている。

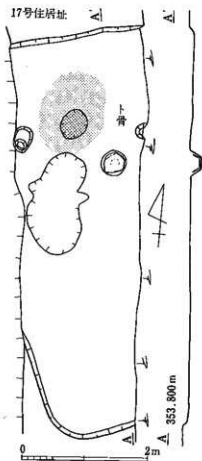
ト骨は炉の東側で床面より出土したもので、ニホンジカの右肩甲骨に、30数ヶ所の焼かれた痕跡が列をなしているが、亀裂は認められない。他に切断されたニホンジカの角なども出土している。

40号住居址 (第7図、図版2・26)

遺構 C区の南端より検出された住居址で、南側は道路部分となり、調査できなかった。西側には41号住居址が構築されている。規模は3.8m×3.2mほどで長軸方向をN-37°-Eに持つ胴張りの隅丸長方形の住居址となる。床面は顕著であり、最大壁高は17cmを測る。北東壁中央より80cmほど内側には地床炉が作られており、横には扁平な河原石が置かれていた。柱穴は5本が検出されている。うち3本は支柱穴と考えられ、



第5図 出土ト骨



第6図 18号住居址

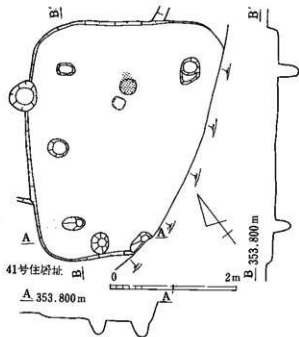
住居址の長軸に直交する方向に柱穴の長軸がくるように掘られている。2本は炉の対辺狀際に対をなして作られており、入口との関係を指摘できる。

遺物 出土量は多くないが、坏、高坏、甌、片口、甕、壺がある。1は内外面とも赤色塗彩された坏で、底部より直線的に開いて口縁部となる。2・3は赤色塗彩された高坏の脚部で、共に4孔の三角形透しがあげられている。4は単孔を持つ底部より内弯気味に開いて口縁部となる甌、5は球形刷の上部がそのまま口縁部となるもので、口縁の1ヶ所をつまみ出し片口としている。小形甕である6は頸部には二連止簾状文が配され、胴部には5条の波状文を施している。7の甕は底部口縁部とも失っているが、胴部はハケの後荒い波状文が施されている。壺である8は頸部に2帯の櫛描平行線を巡らし、それを縦に切る2条の櫛描文が施されT字文を形成している。口縁部はラッパ状に開きそのまま端部に至る。胴部は失われているが球形を呈するものと思われる。赤色塗彩は施されていなかったが、出土遺物中には赤色塗彩を持つ壺の破片も含まれていた。

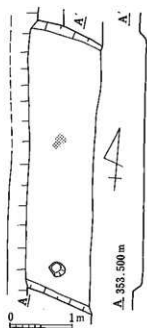
1号住居址 (第8図、図版2)

遺構 A区北側より検出された住居址で、西側を1号溝址により切られ、東側は調査区外へと続いている。調査部分から規模を知ることはできないが、南北の壁の間隔は4.1mを測ることができる。床面は軟弱で壁面も明確ではなかった。床面のはば中央には、僅かに焼土化した部分が認められ、地床炉となる可能性がある。

遺物 検出できた部分が少ないため出土遺物は少ない。1-



第7図 40号住居址



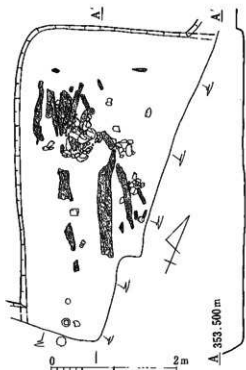
第8図 1号住居址

3は高坏で脚部には円形の透しが3孔あけられている。1の坏部は脚部より僅かに開いた部分で軽い稜をなし、内弯気味に開いて口縁部となる。2・3は脚部であり2には赤色塗彩が施されている。4は小型器台で坏部は直線的に外開し、脚部は筒状の体部から裾部が大きく開いている。ヘラミガキは施していない。5は台付甕の脚部でていねいなハケによって整えられている。6は埴の口縁部で直線的に外開しており、端部は丸く仕上っている。

11号住居址 (第9図、図版3・4・26)

遺構 B区の南端より検出された住居址で、東側は調査区外、南側は用水路となって調査できなかった。隅丸方形の住居址と思われるが規模は不明である。検出面が南側の用水路より低いため出水があり、床面は良く縮った中央部分を除き不明確であった。壁高は最大17cmを測る。炉、柱穴等付属するものは検出できなかったが、南北方向に伸びる炭化材が多数検出され、焼失住居址と考えられる。

遺物 炭化材の下になって多数の遺物が出土しているが坏の破片がほとんど見られない。1～6は高坏で、坏体下半に僅かに稜を残しているが明瞭ではない。1は内弯気味に開く体部から外反して口縁部となるが、他は稜の部分より外反して口唇部に至る。脚部は1が「ハ」の字状に開くのに対して、5・6は筒状の脚体部に、大きく広がる裾部が付けられている。小型丸底土器である7～9は扁平な球形に近く、よく縮った頸部から内弯気味に外開して口縁となる。作りはあまり良くない。10～16は甕であるが種々の器形がある。10は僅かにくびれた頸部から軽く外反して立ち上がり口縁部となる。胴部にはヘラミガキが施され、頸部に凹線を1本巡らし、口縁部には文様とも思える強いヘラミガキを施している。11・12は胴部上半に最大径を持ち、外面はナデで整えている。13～16は最大径を胴部中央付近に持ち、12を除き球形胴となる。口縁部は「く」の字状に外反している。17・18は逆で僅かな段を口縁部を持つ。外面はヘラミガキで整えており、18の口縁部には部分的に鋸歯状



第9図 11号住居址

の文様が付けられている。

12号住居址 (第10図、図版5～7・17)

遺構 B区南側より検出された住居址で、西側約半分が調査区域外となる。東側は16号住居址を切って構築し、さらに10号住居址によって切られている。胴張りの方形住居址になると思われるが規模は不明である。出水のためか床面・壁共に軟弱で不明確であったが、最大壁高は35cmを測ることができた。

本址の最大の特徴は遺物の出土状態にある。覆土内には10～20cm前後の石に混って多量の土器が出土しており、しかもその状態が中心部では厚さ30cmにも及んでいる。遺物は散在しており、完形に近い状態にまで復元できたものは少なく、時代的にも混在が認められる。

遺物 出土遺物は多くほとんどの器種が見られるが、坏・高坏といった小形の器種は全様を知れるものはない。1～3は坏で内弯した体部からそのまま口縁端部に至るものと外反する2種が見られる。1・2の内面には放射状の暗文が施されている。4は須恵器坏蓋で外面には全面自然釉が付着し、平坦な天井部と体部を画する稜は鋭く、口縁部は直線的でそのまま端部に至る。5～14は高坏であるが、全様を知るものはない。坏部である5は体部に2本の稜を持ち、口縁部は大きく外開している。脚部には下部がやや開く筒状の脚体部から、裾部分が大きく開く6～8と、「ハ」の字状に開く10～12があり、後者はさらに長短による分類ができる。9は大形の高坏で口縁部と脚部を失っているが、口径は25cm前後になると思われる。坏部には段を持つ。14は須恵器の小形高坏の脚部で、裾部に鋭い凸線を持ち、端部は屈曲し丸く仕上げている。15は埴の口縁部と考えられる。16・17は甕で多孔と底部を持たないものがある。18～21は甕で長胴となり最大径を口縁部に持つ18・19と、球形胴で明瞭な稜をなさない頸部から外反して口縁部となる20・21がある。18はハケ、19はナデ、20・21は荒いミガキで外面を整えている。22は小形の甕で、球形



第10図 12号住居址

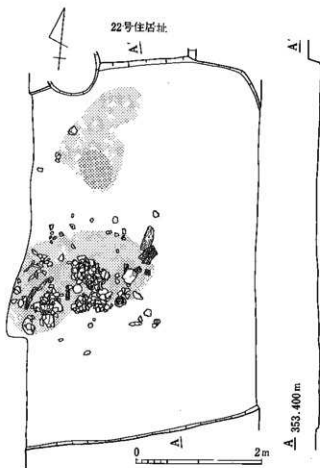
の胴部より外反して開き口縁部となる。23は口縁部を欠いた壺で荒いミガキで整えた後、胴部上半にハケで横帯となる平行線を施し、それを同じ工具で縦に切った文様が施されている。24は大形の壺で胴部は球形に近く、底部は丸底となる。口縁部は外反気味に立ち上がるが開かない。内面はハケ、外面はていねいなミガキにより整えている。金属器には鎌(図版17-22)がある。研ぎ減りのためか細身である。

31号住居址(第11図、図版8~10・24・27)

遺構 B区南側の住居址集中部分より検出された住居址で、西側は調査区域外へと続く。北側は22号、南側は14号の住居址が後に構築されているが、床面が深かったため調査区内では全様が把握できた。規模は南北に5.7mを測ることができ、胴張りで隅丸方形の住居址となる。床面は出水があり明確に検出できなかつたが、中央北寄りに検出された炉や炭化物層の広がりから追っていった。壁面の検出も同様に行った。この炭化物層の他、中央部分では炭化材や焼土が検出されており、焼失住居址と考えられる。

遺物 住居址中央部の炭化物層上からまとまって出土している。高坏1~7には坏部に稜を持つ2~5と、持たない1があり、脚部は下位に膨らみを持つ筒部から、大きく裾が開くものが主体をなす。小形丸底土器は多く、図示できるものが6点出土している。体部はそろばん玉あるいは偏平な球形となり、口縁部はやや内弯気味に外開する。14は口縁部を欠いた罫で、胴部は偏平な球形を持ち、底部は僅かに上げ底となる。甕である15~19は最大径が22cmを超えるものは球形胴に近く、20cm以下のものは卵形となっており、共に口縁部は「く」の字状に外反する。

遺物 住居址中央部の炭化物層上からまとまって出土している。高坏1~7には坏部に稜を持つ2~5と、持たない1があり、脚部は下位に膨らみを持つ筒部から、大きく裾が開くものが主体をなす。小形丸底土器は多く、図示できるものが6点出土している。体部はそろばん玉あるいは偏平な球形となり、口縁部はやや内弯気味に外開する。14は口縁部を欠いた罫で、胴部は偏平な球形を持ち、底部は僅かに上げ底となる。甕である15~19は最大径が22cmを超えるものは球形胴に近く、20cm以下のものは卵形となっており、共に口縁部は「く」の字状に外反する。

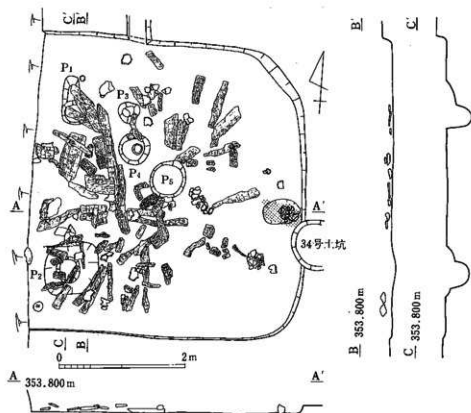


第11図 31号住居址

器面はハケあるいはナデによって仕上げている。19の底部は平底とならず丸底となる。20～27は壺としたもので、いずれも有段口縁となるが、明瞭な段は持っていない。胴部は球形になる27とやや長胴になる24・25があり、ヘラミガキによって整えている。

43号住居址（第12図、図版10～12・17・25・27）

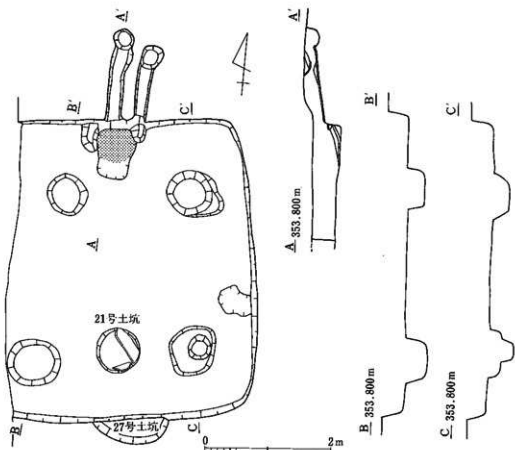
遺構 D区北端より検出された住居址で、南側では42号住居址を切っており、東側は34号土坑に切れ西側は調査区外へと広がっている。南北方向に4.7mを測ることができる隅丸方形の住居址で、主軸方向をほぼ東西に持っている。カマドは東壁中央に作られていたと思われるが、火床と支脚と考えられる立石を除き、残っていなかった。床面は中央付近は良く締まっており顕著であったが、壁際は軟弱で炭化物の広がりから判断した。壁も42号住居址との切り合い部分を除き不明確であった。ピットは6個検出されているが、この内P₃・P₅は覆土上面からの検出であり、住居址には帰属しない。P₁・P₂は主柱穴になると思われる。本址は火災によって失われたもので、覆土中に多量の焼土が見られ、これを取り除くと炭化材が広がっていた。炭化材は主として西側に多く、太さ10cm前後のものを中心に、幅30cmほどの板材と思われるものもある。垂木と思われ



第12図 43号住居址

る10cm前後のものは住居址の中心から放射状に広がっており、中央付近は床面に接していたが、壁際では床面から離れ高くなっている。

遺物 出土遺物は多く、個体ごとにまとまって出土している。坏である1～5はいずれも内面黒色処理が施されているが、火災のために黒色が部分的に消えている。須恵器の模倣とされる体部下半で屈曲し直線的に開く1・2と、体部上半で屈曲し外反して開く3・4がある。高坏である6～8も内面黒色処理が施され、坏部は坏同様の2種があり、脚部は短い。9は埴の胴部で上半には暗文風のミガキが施されている。10は手握ねである。11～19は甕で、やや小形の11は明確な屈曲点を示さない頸部より、短く外反して立ち上がり口縁部となる。器面はナデにより整えている。12～16は長胴化が見られるもので、最大径を胴部中央付近に持つ。口縁部は「く」の字状に外反し、胴部の調整はハケによるものとナデによるものがある。16は底部を欠き瓶として利用されていたと思われる。17・18は頸部の締りが強く、口縁部もさほど外開しない。覆土中より滑石製の勾玉1点(図版17-2)、滑石製管玉1点(図版17-8)が出土している。

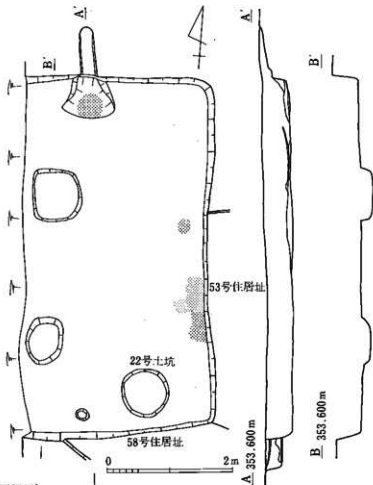


第13図 48号住居址

48号住居址 (第13図、図版13)

遺構 D区南側より検出された住居址で、西側は調査区外へと広がっているが、ほぼ全様を知り得た数少ない住居址である。規模は南北に4.8mを測り、主軸方向をN-5°-Wに持つやや胴張りの隅丸方形の住居址となる。カマドは北壁中央に作られていて、煙道が2本検出された。共に床面より20cmほど上った部分に作られ、長さは1.5mと1.2mで直径30cmほどの煙り出しとなっている。袖と火床から当初東側にあったカマドを、西側に作り変えたと考えられる。袖は僅かな盛上がりが見出されただけで、石などの利用は見られなかった。床面は全体に良く締っており、移植ゴテを通さないほどであった。最大壁高35cmを測った壁も顕著で、ほぼ垂直になる部分もある。柱穴は4個検出されており、直径60~80cmと大きい。深さは2段に落ち込む南西隅を除き25~35cmほどである。

遺物 出土量は少ない。1・2は須恵器の坏で、口径に比較して底径が大きく体部は直線的に開いている。3は煙道部分より出土した大形の鉢で、内面は黒色処理が施され、外面は荒いミガキで整えている。4~6は甕で4は円筒状の胴部を持ち、接合痕を顕著に残している。5は外面にヘラケズリを施し薄く整えた北武藏型の甕である。7はカマド内より出土した小形の甕で、ヘラケズリで整えた胴部から短く立ち上がって口縁となる。底部には木葉痕が観察できる。



54号住居址 (第14図、図版13)

遺構 D区中央より検

第14図 54号住居址

出された住居址で、西側は調査区外へと続いている。北側では床面だけが検出された65号、東側で53号、南側で58号の住居址を切って構築されている。規模は南北方向に5.8mを測る方で、主軸をN-4°-Wに持つ。カマドは北壁に作られており、煙道は火床より25cmほど上った部分から、80cmほどまでが残存していた。袖は僅かな盛り上がりが見出されたが、石が利用された痕跡はなかった。床面は良く締っており、壁も53号住居址との切り合い部分を除き顕著で、最大壁高42cmを測ることができる。床面には3個のピットが見られ、内2個は直径60cmを超える大きなもので、住居の中央部に南北に並んでいる。柱穴とも考えられるが、深さは20cm前後と浅い。

遺物 出土量は少ない。1・2は土師器の坏で内面黒色処理が施されており、底部は丸底となる。3・4は須恵器の坏で体部下半で屈曲をなし、直線的に開いている。底部にはナデが施されている。坏蓋である5は扁平な宝珠形のつまみを持ち、口縁部は内傾して鋭い端部となる。6はコップ形の須恵器である。7は内面黒色処理された高坏で、坏部は内弯してそのまま口縁端部に至っており、脚部は「ハ」の字状に開いている。8・9は長胴甕である。小形の甕である9には内面黒色処理が施されている。

1号祭祀遺構 (第15図、図版14・15・25・28)

遺構 C区南側より検出された遺構で、北側は36号住居址に切られている。限られた調査域で



第15図 1号祭祀遺構

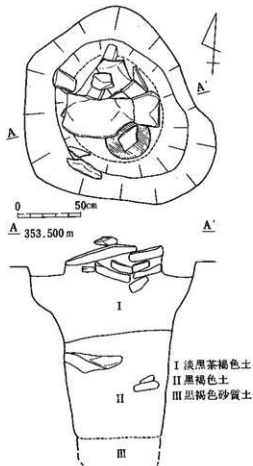
あり明確ではないが、現状で見る限りでは東西約4m南北1.5mほどの範囲に土器と獣骨が散在するが、掘り込み等は見られない。出土層位も住居址の検出面と同じであり、削平など手を加えている痕跡は認められない。ただ西側より、30cmほどの平石が1点検出されている。土器は潰れてはいるものの、ほとんど散在しておらず、完形の状態と並べられたものと思われる。獣骨はかなり散在しているが、土器の間に挟まって出土するものもあることから、土器と同時に存在したものと思われる。

遺物 出土量は多く、坏、高坏、小型丸底土器、壺、甕がある。1～3は坏で1には内面黒色処理が施されている。2は口縁部が僅かに外反しており、内面には荒い鋸歯状の暗文が施されている。大形の3も同様の口縁端部を持ち、底部は上げ底となり、放射状のていねいなミガキで整えている。4～12は高坏でいずれもていねいなミガキが施される。胴部は下部に膨らみを持つ筒部から大きく胴部が開く4～6・9～11と、「ハ」の字状に開く8、そしてその中間となる7がある。坏部は2つの段を持つ12を除き明瞭な線をなす段は有していない。口縁部は5・6・12が外反して開き、他は内弯気味に開いている。13は小型丸底土器で偏平な球形となる胴部から、垂直的に外開して口縁部となる。14・15は口縁部を失っているが壺と考えられ、胴部はヘラミガキで整えている。16～22は甕で16・17は胴部中央に最大径を持ち、口縁部は「く」の字状に外反する。18は球形の胴部を持つもので、口縁部は短く外反し垂直に立ち上がる。外面はハケの後荒いミガキを施している。19はやや小形となるもので、器面はナデによって整えている。20～22はさらに小形の甕で、いずれも最大径を胴部中央に持っており、20は最大径に比べ器高が低い。20は板状工具によるナデ、21・22は細いハケにより整えている。

出土した骨はいずれも獣骨で、イヌの頭骨3個とその体部、ニホンシカの右顎骨、ウマの両前足がある。また獣骨を利用した刀子の柄が1点出土している。

8号土坑 (第16図、図版16・28)

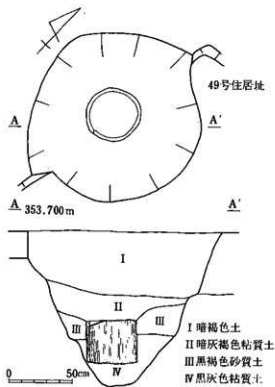
遺構 B区中央部、23号住居址の北側より検出された遺構である。検出面では1.6×1.4mほどの不正円形となるが、60cmほど掘り下げると径85cm



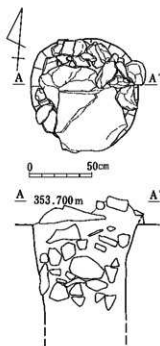
第16図 8号土坑

ほどの円形となる。深さは約160cmまで掘り下げ底部を確認したが、出水があり精査できなかった。検出面付近には厚さ10cmほどの平石が重なっており、中に切石が1点含まれていた。検出面から60cmほど下がった所で覆土が淡い黒茶褐色七から、やや砂質を帯びた黒褐色土に変わっており、木片が混入していた。曲物などの遺物はこの土層中より出土している。

遺物 土器、木製品、鉄器、切石がある。土器のうちには内耳鍋の小破片が含まれている。木製品は曲物と曲物の底板で、曲物は取上げの際亀裂が生じ現状では実測できないが、復元すると、直径8.7cm高さ5.2cmほどで、側板は厚さ2mmの柾目材を2重に回している。縦合せ部分は外側の側板を薄くして、1列縦じで行っている。底板は底部にはめ込まれており、木釘等による側板との結合は行っていない。直径41cmと大形の底板は厚さ1cmほどの板目材を使用しており、4ヶ所に側板と接合させた樺皮が認められる。鉄器は全長30cmと大形で刀子と考えられるもので、長さ9.5cmほどの木製の柄が残っている。基部は4.5cmと短く、うち3cmが柄にはめ込まれていた。切先の肥大は錆によるものとも考えられるが、つぶれによる可能性もある。切石は長さ39cm厚さ13.5cmで幅は24cmの所で欠けており、上下の平坦面には敲打による凹みが見られる。石質は安山岩である。



第17図 19号土坑



第18図 23号土坑

19号土坑 (第17図)

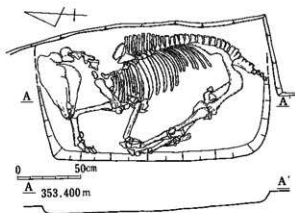
遺構 D区中央南寄りより検出された遺構で、46号・49号住居址を切って構築されている。直径160cmほどの円形で、「V」字状に掘り込まれており深さは125cmを測ることができる。検出面より70cmほど掘ると、中央からやや北西に寄った部分より、直径45cm長さ37cmの丸木を3.5cmほどの厚さにくりぬいた井戸枠が埋め込まれていた。

遺物 古墳時代から平安時代に至る土器片が出土しているが、周辺の住居址からの混入と考えられ、明らかに本址に帰属すると思われるものは井戸枠だけである。井戸枠は内外面に鋭い刃物で削られた痕跡を残しており、一部に炭化している部分が認められる。

23号土坑 (第18図、図版16)

遺構 D区中央付近より検出された遺構で、53号住居址床面を切って掘り込まれている。直径90cmほどの円形で、住居址床面より70cmまで掘り下げたが出水により中止した。壁面は垂直に近くほぼ正円に整えられている。覆土中には大小様々の石が詰められており、それらに混って石臼や切石も入っていた。

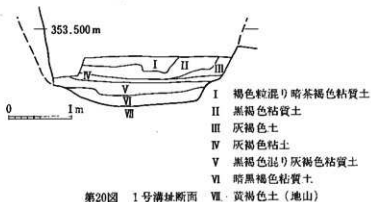
遺物 土器、石臼、切石があるが、土器は古墳時代から平安時代の小破片がほとんどであったが、1点内耳鏡に良く似た胎土を持つ底部破片が出土している。石臼は茶白の上白で、挽き手穴には三重に方形の装飾が施されている。他に自然遺物としてネズミの頭骨が出土している。



第19図 36号土坑

36号土坑 (第19図)

遺構 A区中央付近で1号溝址の覆土中より検出された遺構である。西側が調査区外へと広がっていたため拡張した。調査区西側に排水用の溝を掘っていた際、ウマの頭骨の一部が検出されたもので、この掘り下げにより遺構の一部を破壊してし



第20図 1号溝址断面

まった。したがって正確な規模は不明であるが、 185×100 cmほどの長方形の土壌で、長軸をN-6°-Eに持つと考えられる。検出面からの深さは最大20cmを測った。内部にはウマが頭を北、背を東にし、前足は折り曲げ後足は延ばしたまま腹側に寄せ、埋められていた。



第21図 1号溝址出土木製品

遺物 平安時代を中心に僅かな土器片が出土しているが、本址に伴うと判断できるものは成獣のウマの骨を除き、ない。

1号溝址 (第20・21図、図版16)

遺構 A区より検出された遺構で、幅5mと限られた調査区内に遺構が入ってしまったため、その形状を明確に把握できなかった。調査区域内で長さ85mを測りN-6°-Wの方向に延びており、南はさらに調査区外へと続いている。北側は検出された部分で切れるか、あるいは西へ曲がるものと思われる。幅は3.5~4mほどと考えられ、検出面からの深さは170~150cmを測るが、検出面を平安時代の住居址が検出できる面まで下げているため、本来の深さはさらに50cmほど深いものと思われる。

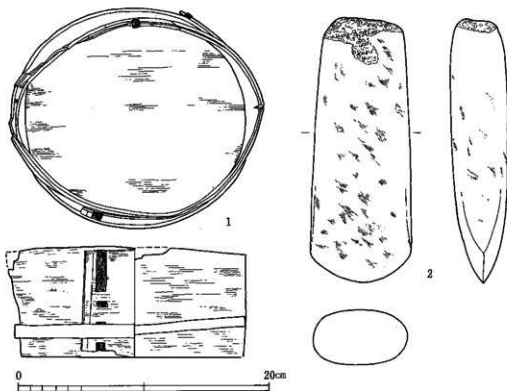
遺物 出土遺物が多いが本址に帰属すると思われるものは少ない。出土遺物には土器、陶磁器、陶器、硯、石臼、木製品などがあり、土器は通称かわらけと呼ばれる土師質土器と内耳鍋がある。土師質土器はいずれもロクロ成形で、顕著な回転糸切りを痕を残している。体部が外反して開く1~4と内湾する5・6がある。内耳鍋の小破片もあるが全様を知れるものはない。陶磁器には龍泉窯系の輸入陶磁器の青磁碗、陶器には瀬戸系の鉢・壺、常滑系の甕の小破片が20片ほど含まれている。硯は長さ8cmほどの小形のもので、陸部中央は使用による磨痕が顕著に観察でき、周辺部には墨が付着している。石臼は茶臼の下臼で、すり合せ面は磨滅しているが、ふくらみをまったく持っていない。石質は輝石安山岩で底部えぐり面を除き良く磨かれており、一部は光沢を放っている。木製品には板状棒状の加工品に加え、漆塗りの櫛が出土している。口縁部を欠いているが、残存口径12.5cmで、底部には高台が削り出されている。器面には黒漆が塗られており、外面には朱による文様が描かれている。同様の破片は他に2点出土している。

その他の遺物 (第22図)

住居址・グリッドから多数の遺物が出土しており、その数はコンテナ60箱にも達している。弥生時代中期から中世に至る遺物であるが、その中心をなすのは古墳時代の遺物で、31号住居址から43号住居址の段階にあたる。整理が充分でないためここでは土器については触れず、玉類・石器・金属等について記載する。

1~4の勾玉はいずれもD区より出土したもので、2が43号、4が44号住居址の出土となる。I

は硬玉製で他は滑石と思われる。管玉である5～9は、5が56号、6は70号、7は39号、8は43号住居址からの出土である。碧玉製の9を除き滑石製と思われる。10～13は滑石製の白玉である。14は3号溝址より出土した碧玉製の石釧で、表には稜をなし斜面となる部分には放射状の浅い線刻が見られる。15～17は磨製石鎌で16は50号住居址、他はグリッドよりの出土である。穿孔は片面より行い、裏面より稜となる部分を僅かに落としている。17は破損後新たに加工を行っている。18は46号住居址より出土した磨製石庖丁で、2孔が穿たれており、刀部は外反りとなる。19は67号住居址、20はグリッドより出土した砥石で端部に1孔が穿たれており、共によく使用されている。21は64号住居址より出土した石製紡錘車である。22・23は12号・26号住居址より出土した鎌で、茎の着柄部分には木質が残存している。第22図の曲物は3号土坑より出土したもので、底部は長径17.4cm短径16.2cmの楕円形となる。側板は厚さ2.5mmほどで2重に巡らされており、縦じ合わせは榫皮によって行われ、さらに外側には幅1cm厚さ3mmほどの板が巡らされており、底板との結合を強化している。底板ははめ込まれており、木釘等による結合は見られない。2は大形蛤刀石斧で2号溝より出土している。



第22図 その他の遺物

V まとめ

今回の調査は先にも触れたとおり、生仁遺跡内に長大なトレンチを設定したような調査であり、そのトレンチ内からは、完掘されたものは僅かであったが、住居址70棟の他、多数の遺構が検出され、また、出土遺物の量も多く内容も豊富であり、改めて生仁遺跡の重要性を痛感した。

これらの詳細な内容については、検討が不充分であるため、今回の調査の中で特に注目される点について触れまとめたい。

70棟検出された住居址の内、弥生時代と考えられるものは、117グリッド以北からの検出であり、南側では遺物の出土も少ない。また古墳時代の住居址の分布は、調査区内全域に広がっているが、中心となるのはB地区でありやや南側に寄っている。さらに奈良から平安時代の住居址は113グリッドに13号住居址が検出されているが、他はA区以南からの検出で、主体をなすのはD区南側となる。このことから集落の中心は、弥生時代から平安時代に至るにしたがって、しだいに南側へ移動していることが分かる。また集落が最も広がった時期は5世紀代と考えられる。

ト骨の出土も注目される。長野県内では生仁遺跡1次調査のY8号住居址、長野市四ツ屋遺跡9号住居址に次いで出土となる。いずれもニホンシカの肩甲骨をそのまま利用したものであり、同様のト骨が18号住居址より出土している。今回の調査ではこれとは別の、骨の内面を削り長さ5cmほどの短冊状に仕上げたうえ、内面側に長方形の彫り込みを並べ、その内部に十字形の焼痕を持つものが4点出土している。神澤勇一氏の分類にしたがえば前者がII型式、後者がV型式となり、II型式は弥生時代後期に、V型式は古墳時代後期から奈良時代に隆盛したとされている。今回の出土も肩甲骨を利用したII型式となるものは弥生時代から古墳時代への過渡期となる18号住居址からの出土であり、短冊形となるものは、祭祀遺構付近あるいはグリッドからの出土であり、遺構分布から見て氏の分類にほぼ一致している。しかし肩甲骨を利用したII型式のト骨の出土は、四ツ屋遺跡9号住居址、生仁遺跡1次調査のY8号住居址、そして今回の18号住居址がいずれも、弥生時代から古墳時代への過渡期と限られた時期にあたり、しかも住居址から出土することの少ないとされるト骨が、住居址床面付近からの出土となっており、特異性が感じられる。また骨が残る環境に問題はあがるが、県内からの出土はすべて北信であり、しかも善光寺平南域となる点についても注目しなければならない。

県内における古墳時代の祭祀遺構（遺跡）で、遺物を多量に出土しているものとしては、山岳、巖石にかかわる遺構あるいは、古墳に関係するものを除けば、長野市の駒沢新町遺跡、中野市の新井大フロ遺跡などが知られている。駒沢新町遺跡では古墳時代の祭祀遺構が5ヶ所検出されており、湧水等の関係から農耕祭祀跡と考えられている。また新井大フロ遺跡では2ヶ所より検出されているが、その施設あるいは性格については明確にされていない。今回の調査で検出された祭祀遺構は、掘り込みがなく、土器と共にウマの面前足、イヌの頭骨3個とこれと同個体と思われる骨、そして出土位置からこれに共伴すると思われるト骨3点が出土している。生仁遺跡の骨

の遺存状態から見て、ウマの向前三足のみの出土は異常であり、当初から前足だけが供献されたと考えられ、またイヌの骨もその出土状態から見て埋葬とは考え難く、やはり供献されたものと考えられる。注目されるのは、遺跡内より出土する骨のうち、シカについてはそのほとんどが割られ、食用とされているのに対して、ウマ・イヌにはそうしたものがほとんど見られない点で、祭祀遺構の性格を考える上で重要であろう。同様の性格を持つ遺構の検出が全国的に見てどうか、十分に検討を行っていないため不明であるが、古墳時代のイヌの骨は極めて少ないとのことであり、貴重な資料である。

生仁遺跡には中世の館があったとされ、生仁館と呼ばれている。更級埴科地方誌によれば、その創始については明らかでないが、大塔合戦（1400）に雨宮弥五郎と共に生身火和守の名が見え、市河文書市河頼房軍忠状に、至徳4年9月と応永10年に生仁城において、戦いがあったことが記載されているという。館は南北260m東西250m程あったとされ、本郭は北端の高地に位置しており、明治の初年当時まで、南北90m東西120mほどの方形に巡らされた堀が、残っていたといわれている。今回調査を行ったC区は、この本郭の東部に当たるが、館に関係する遺構は検出できなかった。A区より検出された1号溝址は、溝内から出土した陶磁器が13世紀から15世紀のものであることから、館に関係する可能性が高い。しかし1号溝址の南端は本郭とされる高地の北側から280mほどあり、まだ南へと続くことから、260mであったとされる南北よりやや長くなる。また溝の北端は西へと屈曲しているようであり、本郭とされる部分まで延びるのかが不明であり、問題点も多い。遺構が比較的深い部分にあるため、は場整備による削平は免れていると思われるので、今後の調査により明らかにしていきたい。

今回の調査で、土坑として扱った23号土坑に代表される直径90cm前後の円形で、垂直に深く掘り込まれた遺構も注目される。同様の遺構はこれまでに、屋代遺跡群の馬口遺跡で1基、北中原遺跡で1基、大境遺跡で4基、松ヶ崎遺跡で1基が確認されている。北中原遺跡で深さ230cmまで掘り下げたが、出水し底部を確認できなかったほか、いずれも底部まで掘り下げが達していない遺構で、これまで井戸址として扱ってきた。遺物は大境遺跡から出土した播鉢以外になかったが、屋代遺跡群を厚く覆っている砂屑を覆土に持つことから、中世の遺構と考えてきた。今回の調査でも、内耳破片・曲物・茶臼・切石などが出土しており、1～3号土坑が1号溝址に切られていることから、中世の遺構と考えられる。18基検出されたこの土坑は、2基から3基が1つのまとまりをなすものが多く、石が詰められている遺構も見られ、はたして井戸址なのか疑問が残る。

VI 生仁遺跡出土の骨角器と動物遺体

信濃町立野尻湖博物館 中村由克

昭和63年度の生仁遺跡の発掘では、たいへん多くの動物の骨類が出土した。本稿では、これらの骨角器や人為的に破砕された獣骨などの記載と動物遺体の概略についてふれ、動物遺体の記載については、次の機会にゆずることとする。

1 骨角器・骨資料の記載 (図版18-21・28・29)

1) 骨鏃

1・2は基部をもつ骨鏃である。1は器体と基部に段を有するもので、断面は扁平形、裏面中央に骨の内表面を残す。シカの骨製で、削ったあとみがかれている。2は器体と基部に段がみられないもので、断面は半円形で厚みがある。裏面中央に骨の内表面を残し、ほぼ全体に削痕が認められる。シカの手手・中足骨製。3・4は器体と基部の区別が明確でない骨鏃である。断面形は円形で、基部には荒い削痕が認められる。

2) ヤス状刺突具

5は断面が扁平形で厚みがあるもので、先端をとがらせ、かなり長い棒状の道具であることからヤス状刺突具と判断した。裏面基部側に骨の内表面が少し残る。6は断面がうすい扁平形で、削ったあとみがかいて仕上げている。裏面中央には骨の内表面がのこる。

7・8は逆刺のあるヤス状刺突具である。7は側縁に浅い逆刺がつけられており、断面は三角形、一面には骨の内表面をのこす。シカの手手・中足骨製。鉋頭の可能性もある。8は未成品。

3) 狷形角製品

9はそりのある鹿角枝部を利用したもので、金子・忍沢(1986)の長型(ⅢC型)に属す。上部に三条の刻線、中央部は断面長方形に削り、盲孔2ケの下に貫通孔を有す。下部には溝を有し、内部はソケット状に穴があげられている。10・11は鹿角の短い輪切りの一端よりソケット状に穴があげられたもので、10にはほぼ中央に貫通孔がつけられている。

4) 鹿角製刀子柄

鹿角特有のそりを利用し、断面がだ円形ないし宝珠形に加工された資料が5点ある。12は最も典型的なもので、茎穴は長1.65cm、幅0.75cmの細長いだ円形で、上部より1cmほどのところに径4mmの目針孔があげられている。柄頭は削磨された平坦面をなす。13~15には目針孔が認められず、また16は茎穴があげられていない。

5) 鹿角製品

17は鹿角の角座と第2枝以上を切断し削って整形したもので、上部には1cmほどの孔があげられている。18は枝角の先端付近を用い、基部はくさび形に削り、先端部はとがらせている。19は

18と同様な基部をもつが、上端は平らにすり切られている。ともに器種・用途は不明である。

6) 切断された鹿角

20・21は角幹を短く輪切りにし、中に穴をあけたものである。20の側面は削られている。未成品であり、器種・用途は不明である。22・23は枝角を切断したもので、22はさらに削って整形されている。24は第2枝と第3枝を有する切断された鹿角である。切断部には細く鋭い刃物による切れ痕が3、4本残されている。25は角座部分の切断された鹿角で、第1枝は折れている。

7) 骨製装飾品

26は骨の緻密質を平板状にみがき、長方形に切断し、直径5mmほどの孔を2ヶ両側からあけており、垂飾等の装飾品と考えられる。

8) 刻骨

27は角幹の角座に近い部分の片側面を面取りし、幅1.5mm、深さ2mmほどの鋭い刻線が9本認められ、これを斜めに切断して角が分割されている。面取りした表面には、部分的に磨滅が認められる。角座側は破損している。28は枝角の先端部分で、わずかに面取りされた片側面に幅1mm、深さ1.5mmの鋭い刻線が8本あり、下側は欠損している。先端は削って整形されている。

9) ト骨

ト骨には、シカの骨の緻密質を薄板・短冊状に整形し、骨の内面側より長方形の鑲を彫りこみ、その中に十字形の焼痕がついている古墳時代の29～32と、シカの右肩甲骨をそのまま利用して点状焼灼している弥生時代の33の2種類がみとめられる。29は骨端部の海綿質を残しており、長さ7mm、幅3～4mm、深さ2mmの鑲が横に2列彫られている。下側は破損。30は内面の整形がやや荒く、深さ1.5mmの鑲が彫られ、焼痕中央部に生じた亀裂によって破損している。31は幅17mmで、いねいな整形をおこなっており、鑲は長さ10～7mm、幅3mm、深さ1mm程度の長方形で、十字形の焼痕にそって亀裂が発生している。32はやや厚い骨片を用いており、焼痕をわずかに残す位置で破損している。33は肩甲骨のある面より焼灼がおこなわれ、18mmぐらいの間隔で直径2mmの焼灼が点状にみとめられ、まわり4～5mmがわずかに焼け焦げている。

10) 切断された中手・中足骨

34はシカの中手・中足骨の遠位の骨端部である。骨に直交する鋭い切れこみが周囲から彫られ、その部分をたたいて折りたたんだものである。骨器素材を得るための加工と推定される。

11) スパイラル剥離による骨端部破片

35・36はシカの骨の骨端部破片である。・印を打点とするスパイラル剥離によって生じたもので、残核にあたるものである。35は右脛骨の遠位端で、台石の使用はみとめられない。36は左橈骨の近位の骨端部である。台石の使用はみとめられない。

12) スパイラル剥片

シカの四肢骨を素材とすると思われる。打点（・印）に注目すると、①打点と台石との接点（○印）の両方あるもの、②打点のみみとめられるもの、③打点は離れた場所に推定されるもの

の3種類がみとめられる。37は、①のタイプで2点から力加わっている。台石との接点側の断面がうすく鋭いことが特徴である。38~42は②のタイプである。この剥片は打点が1ヶ所で、末端側の断面は厚くなる傾向がある。台石は用いず、土の上で剥離をおこなったと推定される。43~45は③のタイプで、打点はみとめられず、派生的に生じたチップに相当するものと思われる。

2 動物遺体

今回の調査では多くの動物遺体が出土しているが、そのうち鑑定ができたものは、シカ (*Cervus nippon*) 81点以上、イノシシ (*Sus scrofa leucomystax*) 10点、ウマ (*Equus caballus*) 17点 + 1頭分、イヌ (*Canis familiaris*) 14点 + 2頭分、鳥類 9点などである。

シカの骨は量的に一番多く、また指骨などの小さな骨をのぞきほとんどのものが、人為的に破砕されている。これは道具の素材となっただけでなく、食料として骨髄を抽出するために打ち割られたものと考えられる。イノシシの骨は数が少ない上、シカと同様に指骨等の小さい骨が多い。人為的な剥離痕は、確認できなかった。

一方、ウマ・イヌの骨は1ヶ所に同一個体に属すると思われる骨がまとまって出土する例が多い。また人為的な剥離痕がみとめられないことから、ウマやイヌは食料とはされず、埋葬されたもの、あるいは儀礼に関係したものと推定される。部位の判明した骨は第2表のとおりである。

これら以外に、中世の溝よりハタネズミ (*Microtus montebollii*)、ドブネズミ (*Rattus norvegicus*) の頭骨、マツカサガイ (*Inversidens japonensis*)、コガネムシ属 (*Minela* sp.) 又はサクラコガネ属 (*Anomala* sp.) の右上翅基半部およびヒシ (*Trypa* sp.) の種子が出土している。

3 生仁遺跡出土の骨角器・骨資料の意義

今日報告した骨角器は、弥生時代後期に属すると思われるト骨 (33) と頸形角製品 (9) をのぞくと、ほとんどが古墳時代に属するものと考えられる。弥生時代のもは、第1次調査出土のト骨 (Y 8号住)、刻骨 (Y 7号住) があつたが、今日新たに資料が増加した。古墳時代の骨角器は、長野県では丸子町鳥羽山洞穴の角製品があるぐらいで、また同時代のもは佐渡の浜端洞窟、千種遺跡あるいは神奈川県三浦半島の間口洞窟など海岸部の遺跡に類例が知られるぐらいである。鉄器が存在し、骨角器の比重が小さくなっていく段階とされているが、他の材質の道具との補充関係からも興味深い資料である。また、漁具の存在は、魚の捕獲が生業の中で重要な部分を占めていたことが予想され、長野市宮崎遺跡とも関連し内陸地における生業復元にとって重要な資料となろう。

1号祭祀からは、ト骨 (短冊状)、刻骨各2点、刀子柄といっしょにシカ、イノシシ、ウマ、イヌなどの骨が出土しており、きわめて重要な出土状況だといえよう。ト骨、刻骨は全国的にもそれぞれ29遺跡 (神澤, 1983)、12遺跡 (木村・神澤, 1987) に報告されているだけのもので、生仁遺跡の出土例は今後の研究にとって欠かせないものとなるであろう。生仁遺跡は相当広い範

圃にわたっているが、骨角器だけをみても弥生～古墳時代にまたがって、いろいろな地点から出土しているので、今後、この遺跡の発掘調査、保存は重要な意義をもってくると考えられる。

謝辞：動物・植物遺体の鑑定にあたっては、信州大学の西沢寿晃氏、野尻湖博物館の近藤洋一氏、愛知学院大学の宮尾嶺雄氏、大阪市立自然史博物館の宮武頼大氏、石井久夫氏、同志社香理中高校の伊東徳治氏、神戸大学の江雅輝樹氏に多くの御教示をえた。深謝申し上げる次第である。

引用文献

金子浩昌・忍沢成視 (1986) 骨角器の研究。縄文篇 I, 慶友社, 410 P

神澤勇一 (1976) 弥生時代、古墳時代および奈良時代のト骨・ト甲について。駿台史学, 38, P. 1-25

神澤勇一 (1983) 日本における骨ト、甲トに関する二、三の考察 (一)。神奈川県立博物館研究報告, 11, P. 1-41

木村幾多郎・神澤勇一 (1987) 刻骨・ト骨。金岡・佐原編「弥生文化の研究」, 8, P. 55-70

第1表 骨角器・骨資料一覧表 (遺構()内は時期)

No.	名 称	グリッド/遺構	大きさ (cm)	重量 (g)	素 材	備考	
1	骨 鏃		46号住(古)	8.55×0.9×0.5	4.1	骨	
2	"		44号住(古)	7.85×1.15×0.68	3.3	シカ中手・中足骨	
3	"		43号住(古)	5.8×0.58×0.59	1.7	骨	
4	"	144		5.1×0.7×0.65	2.5	骨	
5	ヤス状刺突具	27		7.15×1.25×0.72	6.65	シカ中手・中足骨	
6	"		66号住(古)	5.7×1.0×0.4	2.6	骨	
7	"		49号住(平)	8.45×0.9×0.85	6.2	シカ中手・中足骨	カエリ
8	"	?		2.75×0.75×0.65	1.1	骨	"
9	菱形角製品	129	(弥?)	6.7×2.05×1.7	10.4	シカ角	
10	"		53号住(奈)	3.55×1.8×1.8	6.4	"	
11	"		16号住(古)	2.9×1.4×1.5	3.4	"	
12	鹿角製刀子柄		31号住(古)	10.25×2.35×2.1	29.3	"	
13	"		12号住(古)	11.45×2.15×1.7	26.4	"	
14	"		1号祭祀(古)	9.2×1.8×1.4	14.3(処理後)	"	破損
15	"		21号住(古)	8.6×2.6×2.05	18.3	"	"
16	"		11号住(古)	7.8×1.8×1.25	10.8	"	未成品
17	鹿角製品		66号住(古)	16.5×14.8×3.65	17.3	"	
18	"	118		5.45×1.65×1.25	5.1	"	
19	"		21号住(古)	3.45×1.95×1.55	4.9	"	
20	切断された鹿角		46号住(古)	4.5×3.15×3.0	29.1	"	
21	"		70号住(古)	4.05×3.3×2.8	18.2	"	
22	"	40		12.2×2.2×1.7	29.6	"	
23	"		59号住	3.15×1.25×1.15	3.5	"	
24	"		52号住(古)	21.9×14.7×2.85	185.5	"	
25	"		66号住(古)	9.95×7.9×4.65	112.5	"	
26	骨製裝飾品	D区溝土内		1.45×2.15×0.35	1.5	骨	

No	名 称	グリッド/遺構	大きさ (cm)	重量 (g)	素 材	備考
27	刻 骨	137 1号祭祀(古)	10,4×3,5×3,25	78.5	シカ角	
28	"	137	5,7×1,75×1,75	9.5	"	
29	ト骨 (第V型式)	36号住(古)	5,3×2,25×0,55	1.7	シカ(?)骨	1号祭祀?
30	"	48号住(奈・平)	4,45×1,2×0,4	1.8	"	
31	"	137 1号祭祀(古)	4,35×1,75×0,2	1.0	"	
32	"	137 1号祭祀(古)	5,0×1,15×0,4	2.2	"	
33	" (第II型式)	18号住(弥)	13,3×5,7×4,0	36,6	シカ右肩甲骨	
34	切断された中手・中足骨	46号住(古)	4,6×3,7×2,55	20,4	シカ中手・中足骨	
35	スノバイラル剥離による骨端部破片	46号住(古)	14,5×4,5×3,1	65,1	シカ右脛骨	
36	"	40号住(弥)	6,8×4,7×2,95	20,1	シカ左腕骨	
37	スノバイラル剥片	33	5,4×2,6×1,0	8,0	シカ(?)骨	
38	"	137	5,8×1,8×1,2	7,3	"	
39	"	126 2号溝	7,1×3,0×1,75	9,8	"	
40	"	46号住(古)	12,2×2,1×1,5	17,4	シカ中手・中足骨	
41	"	126 2号溝	12,3×2,55×2,2	23,0	シカ(?)骨	
42	"	137	4,8×1,55×0,9	4,3	"	
43	"	46号住(古)	4,4×1,2×0,85	2,7	"	
44	"	26号住(古)	5,85×2,15×1,6	8,5	"	焼
45	"	26号住(古)	4,6×1,9×0,75	3,5	"	"

第2表 動物遺体の出土部位

(G=グリッド)

シカ	左下顎骨 (J P ~ P 129グリッド), 右下顎骨 (P ₂ ~ M ₂ 54号住・M ₂ ~ M ₃ 1号祭祀 Na48・M ₂ ~ M ₃ 1号祭祀 Na46・M ₂ ~ M ₃ D区表採), 左肩甲骨 (19号住), 右肩甲骨・左上腕骨・左腕骨・左大腸骨 (40号住), 椎骨 (3号住・14号住・1号祭祀), 右脛骨 (46号住), 右中手骨 (1号祭祀 Na49), 中手又は中足骨 (22号住2点・46号住・D区表採), 左脛骨 (1号祭祀), 左距骨 (33G・34G・117G・141G), 右距骨 (56号住・128G), 左基節骨 (50号住・1号祭祀), 右基節骨 (54G), 左中節骨 (125G・128G), 右中節骨 (12号住・26号住), 角 (18号住・19号住・32G・42G・115G・119G・129G), 上顎大白歯 (117G・137G), 下顎大白歯 (26号住・1号祭祀), 白歯 (45号住・66号住・118G)
イノシシ	左下顎骨 (3号住), 左距骨 (40号住・1号祭祀), 右距骨 (118G), 中足骨・左右基節骨・左右中節骨 (54号住), 左基節骨 (115G)
ウマ	左上腕骨・左腕骨・左尺骨 (1号祭祀 Na50), 右腕骨・右尺骨 (125G), 基節骨 (53号住・56号住), 中節骨 (61号住), 末節骨 (35G), 頭骨 (1号溝), 白歯 (13号住・52G・131G・D区表採)
イヌ	頭骨 (1号祭祀 Na45・47), 下顎骨 (36号住2点・55号住・19号土坑), 左肩甲骨 (21号土坑), 椎骨 (43号住・1号祭祀・42G), 右尺骨 (1号祭祀 Na44), 左肩甲骨・椎骨10点・右上腕骨・左尺骨・右腕骨・左右大腸骨・左右脛骨・左膝骨・寛骨2点・肋骨9点 (1号祭祀 Na49), 下顎骨・肋骨・椎骨3点・寛骨・左右尺骨・左大腸骨 (1号祭祀 Na53), 左下顎骨・環椎 (1号祭祀 Na54), 距骨 (1号祭祀 Na5)

住居址一覧表

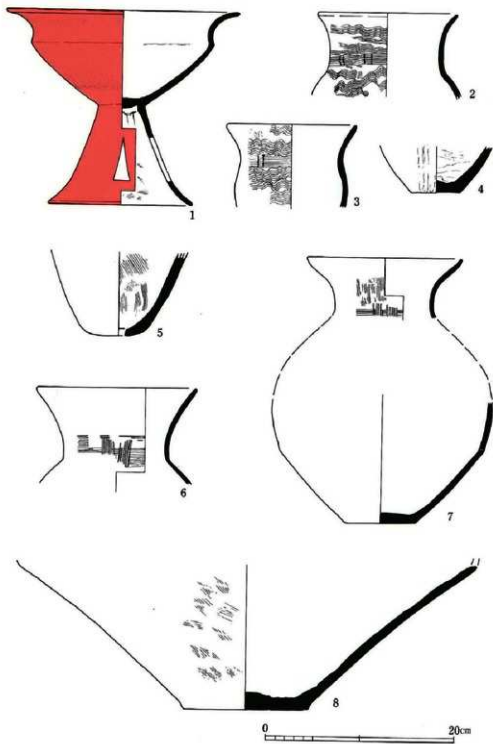
住居址 No.	検出位置 (グリッド)	時代	形態 規模(cm)	主軸方向 (長軸)	おもな出土遺物	備考
1	83・84	古墳	(方形) (410)×			2号住<古 東側調査区外
2	84・85	古墳	(方形) 不明			1号住<新 東側調査区外
3	97・98・99	平安	方形 640×	(N-3'-E)	須惠器高台付環	北壁にカマド
4	88	古墳	不明		土師器甕	9号住と同一の可能性
5	89	古墳	不明		土師器内黒環 灰釉陶器段皿	9号住<新
6	89	古墳	不明			9号住と同一の可能性
7	78・79	古墳	不明		小型丸底	北側に炉?
8	130		(方形)			西側調査区外
9	87・88	古墳	(方形) (600)×		土師器環	西側溝に切られる 北側に炉
10	106・107 108	古墳	(方形)	N-30'-W	土師器甕	北西壁にカマド 12・16・26号住<新
11	103・104	古墳	(方形)	(N-18'-W)	鹿角製刀子柄	外側調査区外 焼失住居
12	106・107 108	古墳			鹿角製刀子柄・鎌	16号住<新 10号住<古 遺物多量に出土
13	113	平安	(方形)		須惠器高台付環	北壁にカマド 31号住<新
14	109・110 111	古墳	(方形)		土師器高環・甕	21・31号住<新
15	144	古墳	(方形)			南内壁と床面のみ検出
16	107	古墳	不明		土師器甕 珉形角製品	10・12号住<古
17	132・133	古墳	不明	(N-48'-E)	土師器甕・環・鉢	北東壁にカマド 2号溝<古 18号住<新
18	131・132	弥生?	(方形) 630×	(N-10'-W)	ト骨	北側壁に炉 2号溝<古 17号住<古
19	128・129	弥生	(方形)		甕・壺	2号溝<古
20	127	不明			弥生高環	床面のみ検出
21	108・109	古墳	不明	不明	土師器環・須惠器大 形鉢・鹿角製刀子柄	14・26号住<古 北側に焼土
22	113	古墳	不明			13号住<古 31号住<新
23	115・116	弥生?	方形 420×	(N-15'-W)	環・甕	東側調査区外
24	117	古墳	不明		土師器甕	33号住<新 西側調査区外

住居址 No.	検出位置 (グリッド)	時 代	形態 規模 (cm)	主軸方向 (長軸)	おもな出土遺物	備 考
25	欠					
26	108	古墳	(方形)	N-23°-W	土師器環・甕 籬	北壁にカマド 10号住く古 21号住く新
27	120	不明	不明			2号溝く古 西側調査区外
28	121	不明				西側調査区外
29	欠					
30	127・128	弥生?	不明			32号住く新
31	111・112	古墳	(隅丸方形) 570×		鹿角製刀子柄	14・22号住く古 北側に炉
32	125・126	弥生	(方形) 650×		籬	30号住く古 2棟の可能性あり
33	117・118	古墳	(方形)		土師器内黒環・甕 須恵器高坏	24号住く古 34号住く新 西側調査区外
34	118・119	古墳	方形			33号住く古 39号住く新
35	142・143	不明	方形 (325)×			37号住く新 西側調査区外
36	138・139	古墳	方形 570×550	N-35°-W	土師器内黒環・甕 籬・卜骨	37号住く新・祭祀遺構く新 西側調査区外
37	140	弥生	不明		高坏・甕	36号住く古 床面のみ検出
38	142	不明	不明			35号住く古 床面のみ検出
39	117	弥生	不明		甕 管玉	34号住く古 中期 東側調査区外
40	136・137	弥生	隅丸長方形 380×(320)			41号住く新 中央東寄 りに炉 柱穴5本検出
41	136	古墳	不明		土師器籬	40号住く新 東壁の一部のみ検出
42	56・57	古墳	不明		土師器籬	43・44号住く新 北側不明 東西調査区外
43	57・58・59	古墳	隅丸方形 470×		勾玉・管玉・骨鉄	42号住く新 飛矢住居址 東壁中央にカマド 遺物多量に出土
44	55・56	古墳	方形 350×		土師器内黒環・甕 勾玉・骨鉄	5号溝く古 42・52号住 く新 東側は調査区外
45	51・52	古墳	隅丸方形 不明	(N-8°-W)	土師器高坏	北壁にカマド 東側調査区外 南側不明
46	36・37	古墳	方形? (580)×		鉄製品・石造丁 骨鉄	49・50号住く古 遺物多量に出土
47	34・35	平安	方形 495×	(N-90°-E)	土師器内黒環・鉄製 品 須恵器へら切り環	東壁にカマド2ヶ所南 側が古い 西側調査区外
48	32・33	奈良~平安	隅丸方形 480×		石製紡錘車・卜骨	柱穴4本検出 西側調 査区外 煙道2本検出 東側が古い

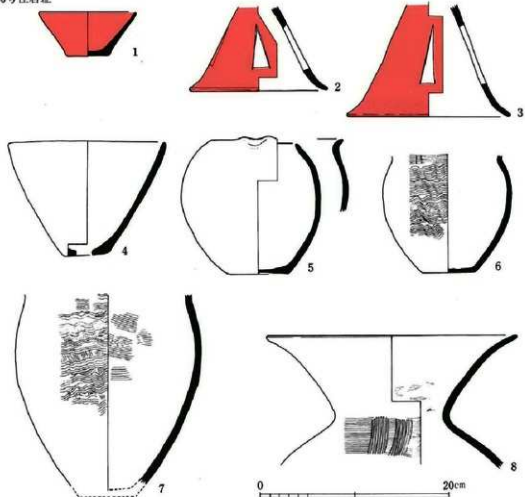
住店址 No.	検出位置 (グリッド)	時 代	形態 規模 (cm)	主軸方向 (長軸)	おもな出土遺物	備 考
49	35・36・37	平安	方形 480×		骨製ヤス状刺突具	46・55号住<新 北壁にカマド 東側調査区外
50	37・38	古墳	隅丸方形 不明		磨製石鏃	46号住<新 51号住<古 西側調査区外
51	37・38	古墳	不明			50号住<新 西側調査区外
52	54・55	古墳	方形 (460)×			44号住・5号溝<古 焼矢住居址 東側調査区外
53	39・40	奈良	不明 (350)×		珉形角製品	54号住<古 58号住<新 北壁にカマド 東側調査区外
54	39・40・41	奈良	方形 580×			53・58・65号住<新 北壁にカマド 西側調査区外
55	34・35	古墳	方形 430×	(N-12°-W)	土師器高環・甕	47・49号住<古 北壁にカマド
56	28・29・30	平安	方形 465×	N-2°-E	土師器高環 管玉	57号住<新 北壁にカマド 西側調査区外
57	28・29	古墳	方形 445×		土師器甕	56・64号住<古
58	38・39	古墳	不明		土師器環・甕 須恵器甕	53・54号住<古 南壁 のみ検出 焼矢住居址
59	47・48	不明	方形 不明			
60	46・47	古墳	不明		土師器高環 (カマド 支脚)	67・68号住<古 北壁にカマド カマド のみ検出
61	43・44	古墳	方形 460×	N-20°-E	土師器甕 勾玉	66号住<古 70号住<新 北壁にカマド
62	42・43	平安	方形 不明		緑釉陶器碗	66号住<新 北壁にカマド
63	41	古墳?	不明			東側調査区外 北壁にカマドがあった と思われる
64	27	平安	方形 不明	(N-10°-E)	須恵器へら切り環 石製紡錘車	57号住<新 西側調査区外
65	41・42	不明	不明			北壁にカマドがあった と思われる 床面のみ検出 西側調査区外
66	42・43	古墳	方形 450×		須恵器大甕・土師器高環 骨製ヤス状刺突具	61号住<新
67	45・46	古墳	方形 480×430	N-38°-E	砥石	60・68・70号住<新 北東壁にカマド
68	46・47	古墳	方形 不明		土師器鉢	60号住<新 67号住<古 西側調査区外
69	欠					
70	44・45	古墳?	不明		土師器高環 管玉	61・67号住<古

图版 1

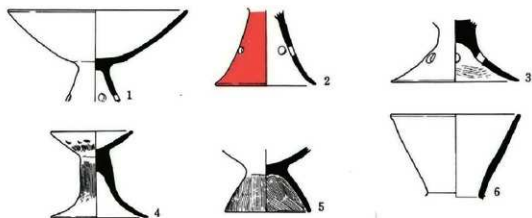
18号住居址



40号住居址

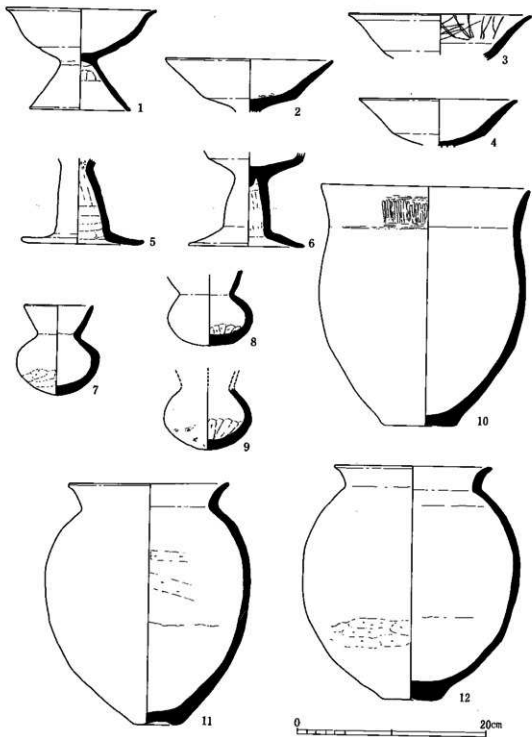


1号住居址

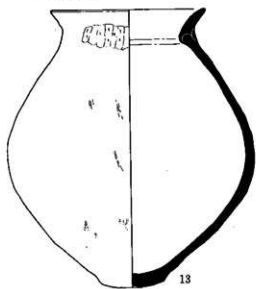


图版 3

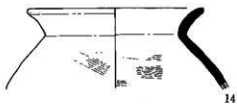
11号住居址



11号住居址



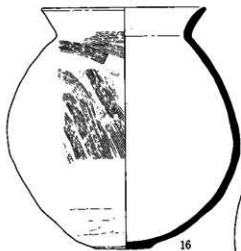
13



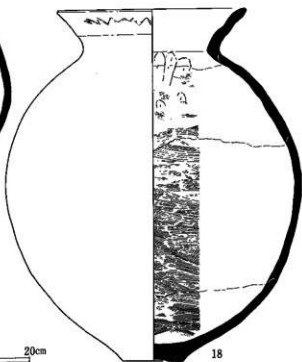
14



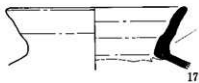
15



16



18

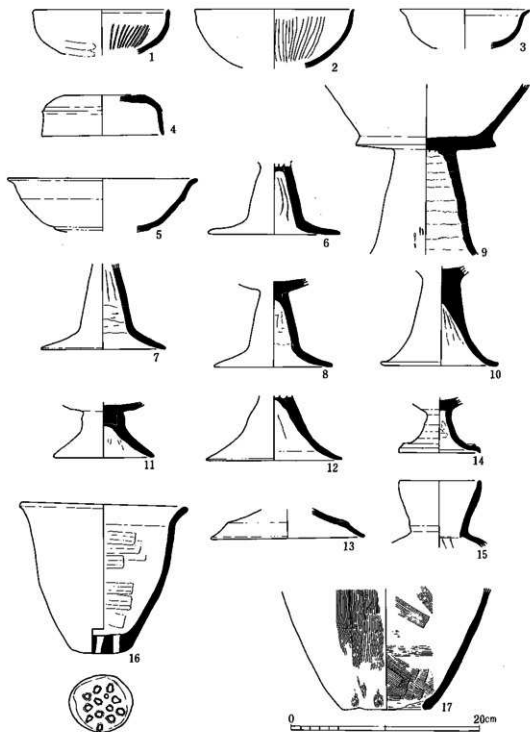


17

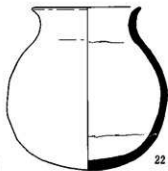
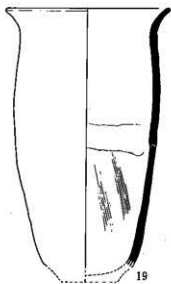
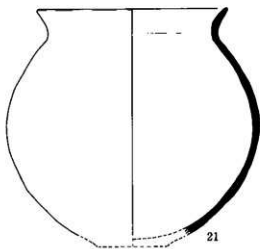
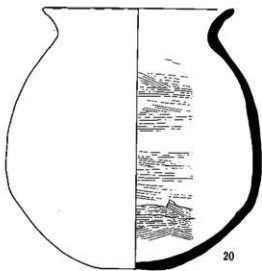
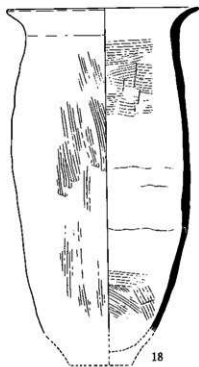


图版 5

12号住居址

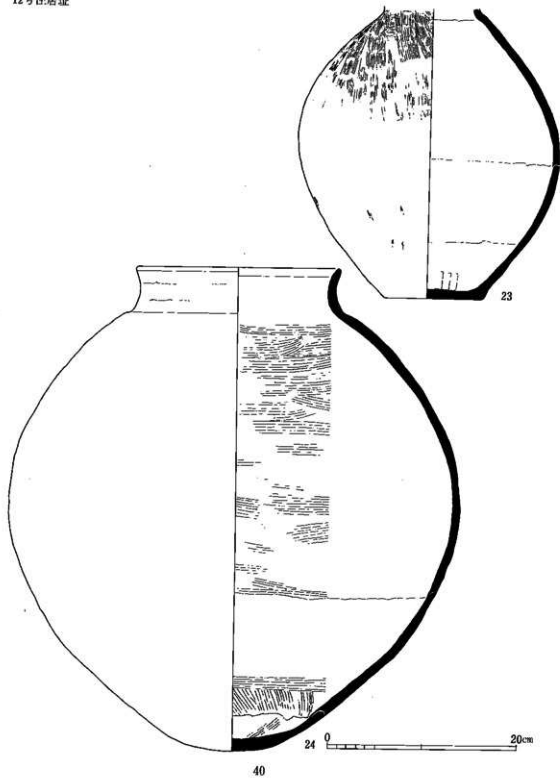


12号住居址

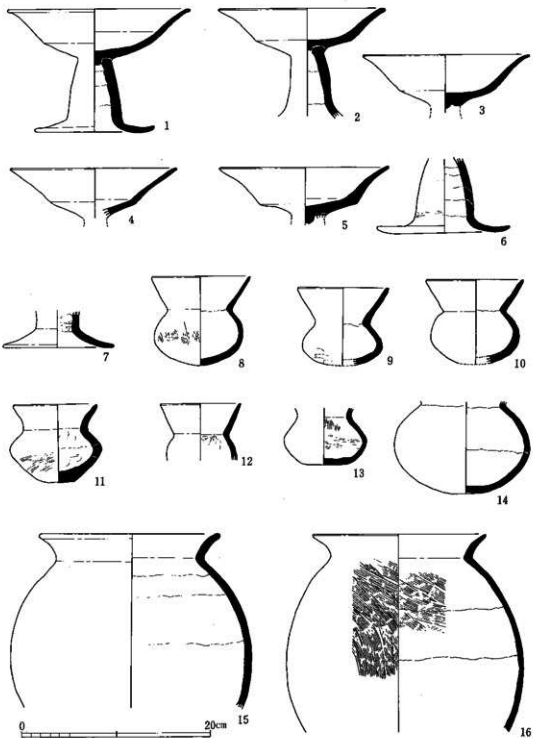


图版 7

12号住居址

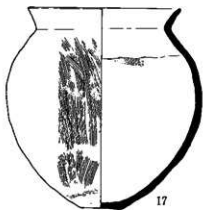


31号住居址



图版 9

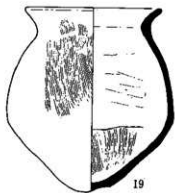
31号住居址



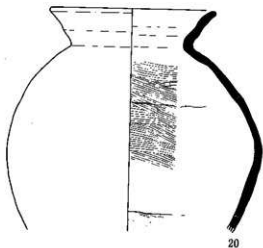
17



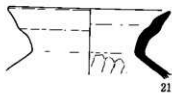
18



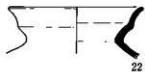
19



20



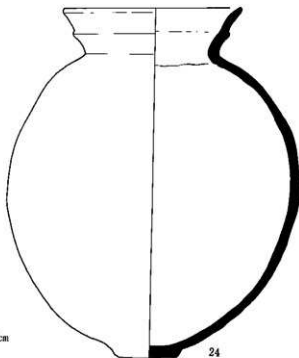
21



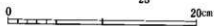
22



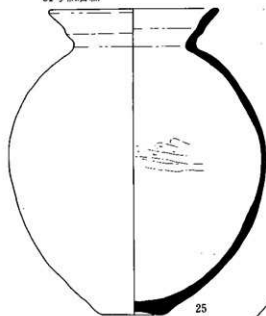
23



24



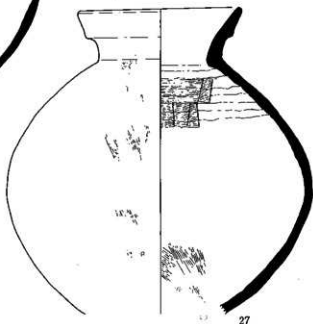
31号住居址



25

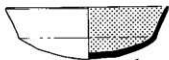


26

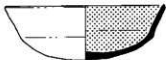


27

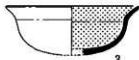
43号住居址



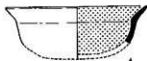
1



2



3



4



5

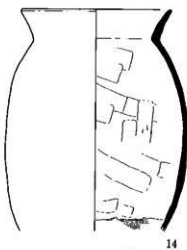
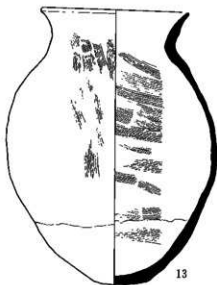
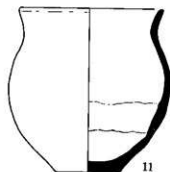
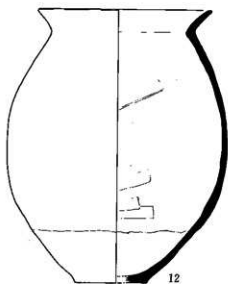


6

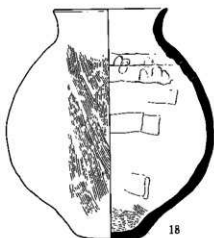
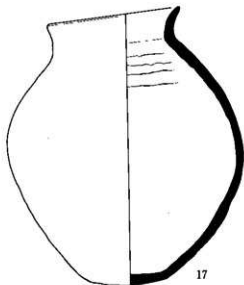
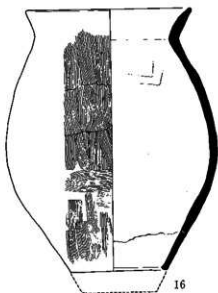
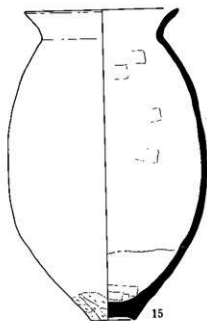


图版11

43号住居址

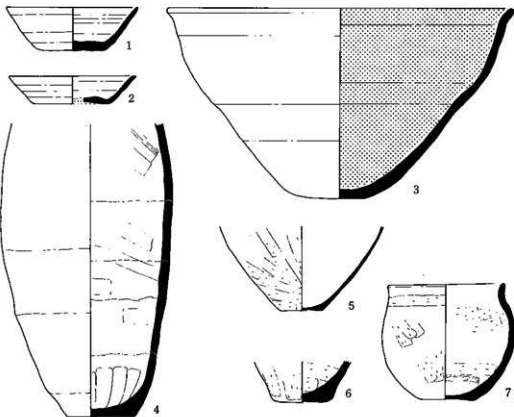


43号住居址

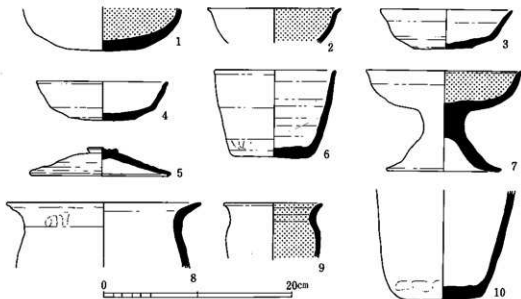


图版13

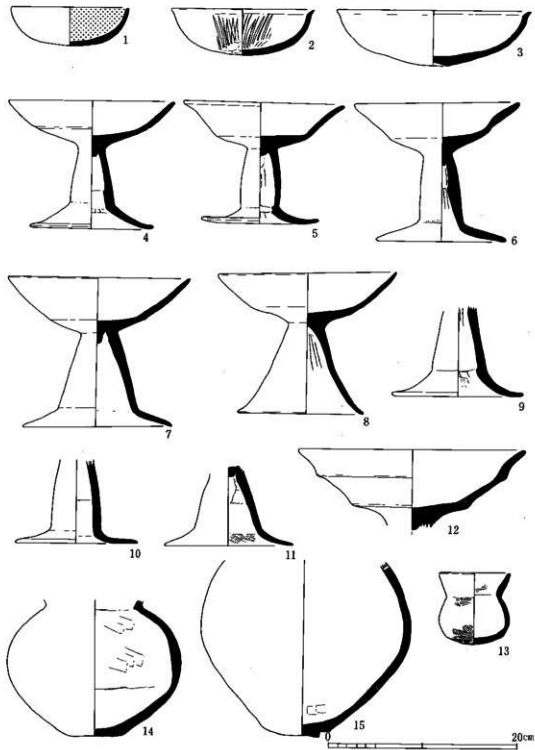
48号住居址



54号住居址

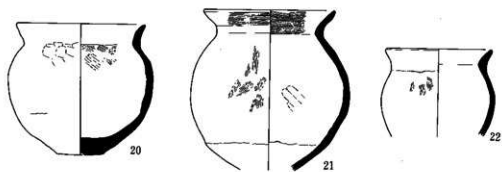
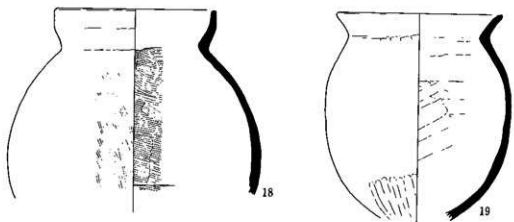
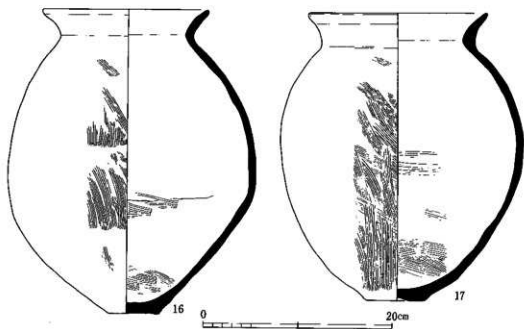


1号祭祀遗址

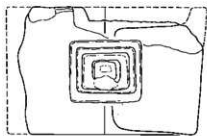
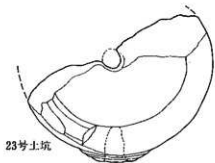
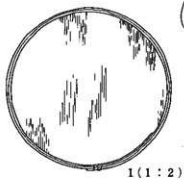
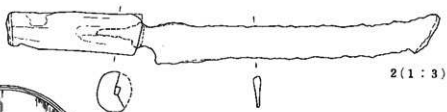


图版15

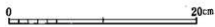
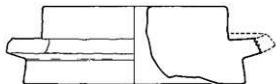
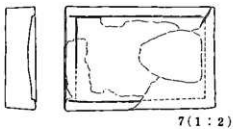
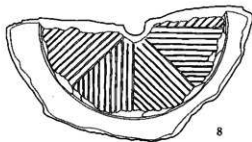
1号祭祀遗址



8号土坑

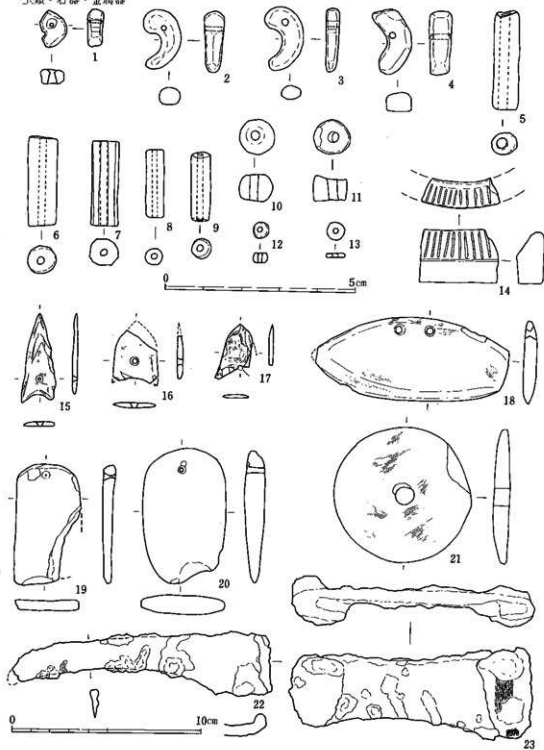


1号沟址

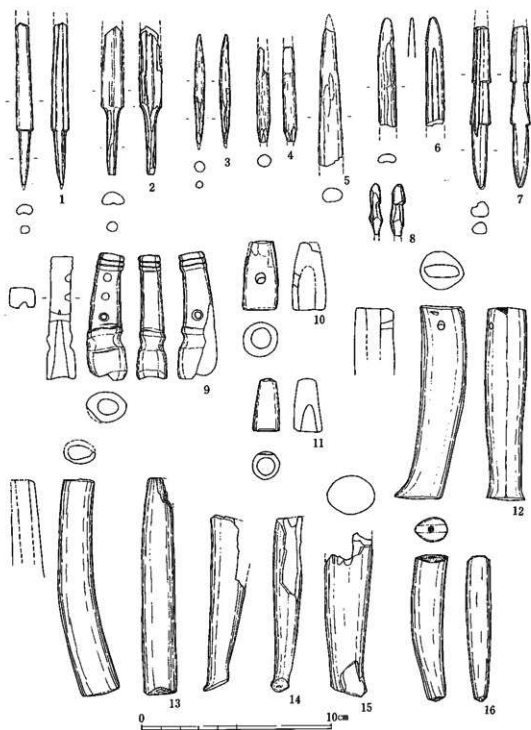


图版17

玉類・石器・金属器

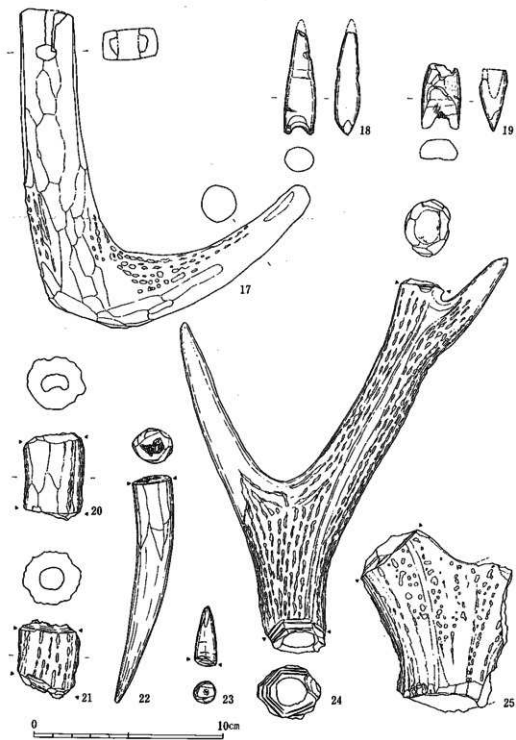


骨角製品



图版19

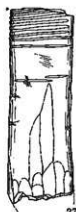
骨角製品



骨角制品



26



27



28



29



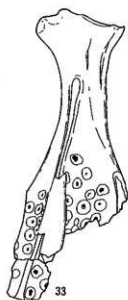
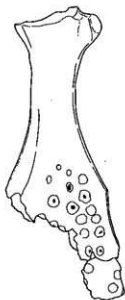
30



31



32

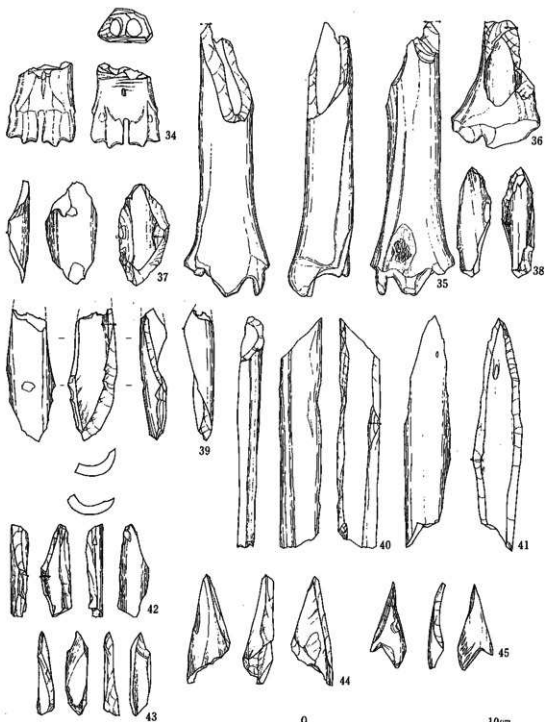


33



图版21

骨角制品

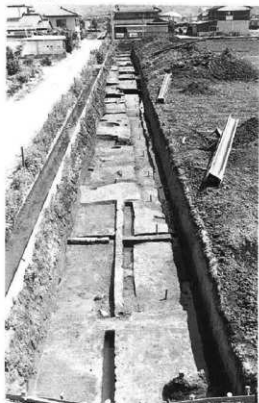




道跡遠景



東小学校発掘調査見学



A区全景



B区全景



C区全景



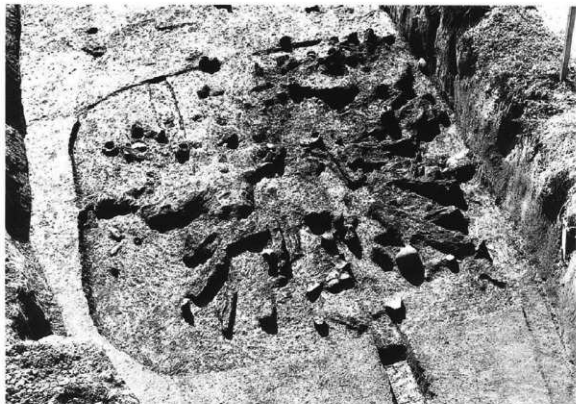
D区全景



18号住居址下骨出土状态



31号住居址遗物出土状态



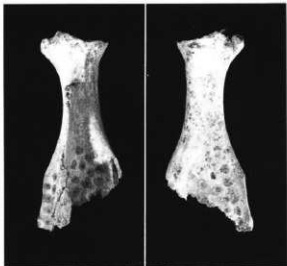
43号住居址



1号祭祀遺構



18号住居址出土遗物



40号住居址出土遗物



11号住居址出土遗物



31号住居址出土遺物



43号住居址出土遺物



1号祭祀遺構出土遺物



8号土坑出土遺物



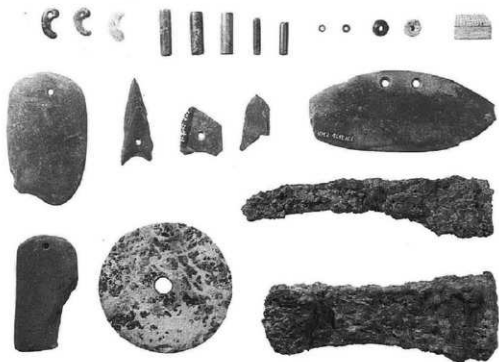
2号土坑出土遺物



2号溝址出土遺物



出土卜骨 (第V型式)



その他の出土遺物



出土骨角器

生仁遺跡Ⅲ 県営両宮地区湛水防除事業に伴う発掘調査報告書一

発行日 平成元年 3月25日

編集 更城市遺跡調査会

発行 更城市教育委員会

〒387 長野県更城市大字杭瀬下84番地

TEL (0262) 73-1111

印刷 信毎書籍印刷機

〒381 長野市西和田470

TEL (0262) 43-2105
